

「ドイツ学生派遣プログラム参加報告書」

京都大学経済学部 4年 山口裕也

- ① 学習成果（今回の派遣に参加する前とした後とで、留学、大学での学習、国際理解への意欲に関して、自分にどのような変化が起きたか、今回の派遣に参加して、次の海外留学についてどのような関心・計画を持つようになったかなど）

具体的な内容は下記で述べるが、1、大きな学びとして視野が広がったこと、2、日本とドイツが協業することの重要性・意義を認識したことである。1点目に関しては、企業訪問、大学との交流を通じて今まで知らなかった分野に触れることができた。ここに学部生が自分だけだったことも加わり、これまで自分が狭い世界で生きてきたを実感し、視野を広げることの面白さ、大切さを理解した。2点目に関して、ドイツを手本にすべき点、ドイツと同じ問題を抱えている点、一方日本が伝えるべき点を様々な分野で発見した。今後各分野で協業する必要性を認識した。お互いに相乗効果を発揮して両国が大きく成長できる可能性があると思う。

- ② 海外での経験

- ③ プログラム内容と重複するため下記参照

- ③ プログラム内容

参加学生の興味に応じ、様々な分野の企業・施設への訪問に加え、ゲーテ大学・ハイデルベルク大学との交流を行った。

企業・施設訪問では、例えばハイデルブルグでは現地の老人ホームを訪問し、施設見学、討論会を行った。これまで老人ホームについて詳しく学ぶ機会がなかった私にとって、視野を広げる良いきっかけになったと思う。ドイツの老人ホームの充実さに驚かされると共に、ドイツの直面している高齢化社会の課題も垣間見ることができた。この老人ホーム訪問を通してだけでも日本がドイツに見習うべきものを多く発見することができたと同時に、両国が解決しなければならない共通の問題も見つけることができた。

大学との交流では、ゲーテ大学での授業参加、ハイデルブルグ大学での共同研究発表ワークショップを行った。ゲーテ大学はかつて留学していたことがあり、懐かしさを感じた。いつ行ってもそうだが、フランクフルトという街、ゲーテ大学はダイバーシティに富んでいる。国境・国籍を排除した考え方、生き方は日本人も見習うべきことだと思う。ハイデルブルグ大学では終日ワークショップを行った。各大学の学生が自分の興味のあるテーマに関してプレゼンし、議論を行うというものである。残念ながら時間・人数の関係で学部生の私は発表ちゃんするチャンスが無かったものの、今まで考えたこともなかったテーマから、自分の興味関心に近いテーマまで様々なプレゼンを聞いたのは非常に良い機会だった。このワークショップでも自分の視野が狭いことを認識することができた。

- ④ 進路への影響について

すでに卒業後の進路（就職）は決定していたこともあり、大きな影響はないが、機会があればドイツをはじめとするヨーロッパ諸国のビジネスに積極的に携わりたいと思うようになった。上記でも述べたがドイツと日本には共通点も多く、共同でビジネスをすることに意義はあると考える。